

太陽とかわす

小川未明

青空文庫

池いけの中なかに水草みずくさがありましたが、長ながい冬ふゆの間水あいが凍こっていましたために、草くさはほとんど枯かれてしまいそうに弱よわっていました。それは、この草くさにとつて、どんなに長ながい間あいだでありましたでしよう。

そのうちに、やつと春はるがきまして、氷こおりが解とけはじめました。池いけの水みずは日ひに増ましぬるんできて、日ひの光ひかりがその面おもてを照てらすようになりましたので、水草みずくさは、なつかしい太陽たいようをはじめあおて仰あおぐことができました。

太陽たいようが、にこやかに笑わらって小ちいさな水草みずくさをじつとながめましたときに、草くさはうれしさに、心こころはもういつぱいで、目めに涙なみだぐんで太陽たいように訴うったえました。

「お日ひさま、もうわたしは、まったく死しにそうでごございました。もしも、あなたがもつと長ながい間あいだわたしをこんなあたたかに照てらしてくだささらなかつたなら、わたしは、ほんとうに凍こえて死しんでしまつたでしよう。どうか、もうわたしを見捨みすてないでくださいまし。わたしちいのむらさきいろ小ちいさな紫むらさきいろ色いろの花はなが咲さきますまでは、どうぞ毎まい日にちのようにお恵めぐみ深ふかい光ひかりで照てらしてくださいまし。わたしは、いまからその場ばになつて、また毎まい日にち雨あめの降ふるのが気遣きづかわしゅうあございます。どういふものかわたしは、この池いけの中なかに棲すんでいるかわずと気質きしつが合あわな

いので、つねに苦しめられますけれども、なんといつても、かわずのほうがわたしより強うございます。それに、かわずは雨が好きで、雨の降るようにいつも訴えますので、わたしたちは短い命を雨のために悩まされるのでございます。どうぞ、お日さま、わたしたちをお恵みください。」と、水草はいいました。

太陽は笑って、水草の訴えを聞いていましたが、「わかった、わかった。」と、その頭を振ってみせました。

ある日、かわずは池の面に浮かんで、太陽の光に脊中を乾していました。そのとき、太陽は、やさしく、かわずに向かっています。

「私は、この大空を毎日東から西に自由に歩いている。おまえは、その池をかってに泳ぎまわることが出来る。私は、空の大王と呼ばれている。してみると、おまえは、池の王さまだ。私は今日から、おまえを池の王さまにしてやる。それにしても、私が、すべてのものに対して恵み深いように、おまえは、池の中のものに対して、だれにでもしなせつでなければならぬ。」と、太陽は諭しました。

わがままでとんまでありましたけれど、いたって人のいいかわずは、すぐに得意になつてしまいました。

「おお、俺は、池の中の王さまになったんだ。この広い池はみんな俺の領地だ。なんと俺はえらいもんだろう。」と、かわずはあたりを見まわしました。

それからというものは、かわずは、朝は太陽の上とともに起き、夕べは、太陽の沈むときまで、ともに水の中をはねまわって、なにやらわからぬことを口やかましくいつて、池の中を治めるためにいつしようにけんめいであつたのであります。

しかし池の底には、かわずのまだ知らない、いろいろな魚や、また恐ろしい虫などが棲んでいました。独り、水の中ばかりでなく、池の周囲には、森があり、やぶなどがありました。そこには、蚊や、ぶとや、はちや、小鳥などが棲んでいます。それらに対しても、この池の王さまであるかわずは、いちいち気を配らなければなりませんでした。

いままで、あんまりなんにも考えるところをしなければならなかったかわずは、夜もろくろく休むことができなくなりました。たまたまいい月夜で、月の光が池の面を黄色く彩りますと、かわずはびつくりして、不意に起き上がって、もう早、お日さまがお上りになったのかと思ひ、大騒ぎをして、口やかましく、しゃべりたてることもありました。

春の日の午後のことでありました。

「だいぶん水も暖かになった。旅行にはいい時分である。幾日かかるかしのれないが、

この広い領地を一巡りしてこようと思う。」と、かわずは、さぎなみの立つ池の面を見渡しながら独り言をもらしていました。

そのとき、そばでこれを聞いていた一ぴきのぶとがありました。

「かわずさん、旅行って、どこまでおいでなさるのでございますか。」と、ぶとが問いました。

かわずは、不意にこういつてきかれましたので、ちよつと驚きました。そして、そばに小さなぶとがいたことに気づきました。

「おまえはまだ知らないが、お日さまは空の大王だ。俺は、この池の王さまなんだ。なんとこの池は広いもんじやないか。お日さまが東の森からお上りなされて、西の森に沈みなさるまでちようど一日かかる。まるで、お日さまは、この池を照らしなされるために、空をああして歩いていなさるのだ。その池は、俺の領地だ。俺がこの池を一巡りせんではないものか、考えてみるがいい。」と、かわずはいいました。

すると、ぶとは、おかしさをこらえながら、

「かわずさん、あなたは、世間がどんなに広いかまだお知りなさらぬ。私は、昨日、馬について、遠方まで行ってまいりました。疲れると馬の体に止まりました。ほかにはも

つと大きな池いけがあります。また、大きな森もりがいくつもあります。かわずさん、あなたは、まだお知りしなされないでしょうが、またにぎやかな町まちがあつて、そこには珍めづらしいものや、きれいなものがいっぱいでした。あなたも世間せけんへ出でてごらんなされたら、こんな池いけは、てんで問題もんだいにならないことをお悟りさとなさつたにちがいありません。」と、ぶとは語かたつたのです。

かわずは、ぶとの話はなしを聞きいて、それをほとんど信しんずることができないほど驚おどろいたのです。そして、もしそれがまつたくほんとうであつたなら、自分じぶんのいままでの考かんえが一変ぺんするこゝとを自分じぶんながらおそれたのです。

「おまえは、なにか夢ゆめでも見たみたのじやないか。」と、かわずはいいました。

「かわずさん、なんで夢ゆめなものですか、まつたくほんとうのことでございます。」と、ぶとは答こたえました。

かわずは、心こころの内うちで、なんで、ぶとが馬うまなどについていつたろう、ゆかなければ、そんなものを見みてこなかつたろう。見みてこなければ、俺おれの頭あたまの中なかまで、ひっくりかえすようなことをしなかつたろう。そうすれば、俺おれは、やはりこの池いけの王おうさままで、安あん心しんしていられたものを、とんでもないことになつたもんだと思おもいました。かわずは、しばらく考かんえてい

ましたが、

「おまえは、昨日見てきたことをすっかり忘れてしまえ。」と、かわずは、ぶとにいいました。

すると、ぶとは、当惑そうにかわずを見つめて、

「だって、この私の頭の中に刻みつけられた、世間の有り様を、どうして忘れることができませんしょう?」と、ぶとは答えました。

かわずは困ってしまいました。

「おまえは、そのことをだれかに話したか。」と、かわずはたずねました。

「いえ、まだ私は、だれにもあいませんでした。今度あつたら、みんなに聴かしてやろうと思つています。」と、ぶとが答えました。

かわずは、ぶとがみんなに、そのことを聞かしたら、そのとき、みんなはどんなに騒ぎ出すだろう。そして、この池をいちばんいいところと思わなくなりはいしないかと心配したのです。

かわずは、しばらく思案に暮れていました。

「そうだ。このぶとの小さな頭の中に、その世間というものがみんな入っているはずだ。」

それをすっかり、俺おれのものにしてしまうことは造作ぞうさくもないことだ。俺おれが、このぶとをのんでしまえば、みんな俺おれのものになつてしまふだろう。そして、だれにも、しゃべられる心しん配んぱいもなくなつてしまつて、このうえもない、いいことなんだ。」と、かわずは考かんえましました。

かわずは、不意ふいに、大きな口くちを開あけて、小さなぶとを頭あたまからのみこんでしまいました。しばらくたつてから、かわずは、世間せけんがそっくり自分じぶんの頭あたまの中なかに入はいつてしまつたものと思おもつて、それを考かんえ出だそうとしました。しかし、ぶとのいつたような世間せけんは、てんで見みえなかつたのであります。そこでかわずは、ぶとがうそをいつたのだと信しんじました。そして、やつと安あん心しんしました。空そらの大だい王おうはお日ひさまで、池いけの王おうさまは自分じぶんだと思おもつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

※表題は底本では、「太陽《たいよう》とかわず」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

太陽とかわず

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>